

<論説>『プレブス・リーグ』の成立と展開：イギリスにおける労働者教育の一断面

著者	北川 隆吉
雑誌名	社会労働研究
巻	21
号	1-2
ページ	29-54
発行年	1975-01-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018009

『プレブス・リーグ』の成立と展開

——イギリスにおける労働者教育の一断面——

北川 隆吉

一、はじめに——問題と視角——

「プレブス・リーグ(Plebs League) ラスキン・コレッジ(その項参照)が労働階級のために高等教育を授ける機関であり乍ら、財政的必要よりしてその教育方針を甚だ曖昧なるものたらしめざるを得なかった事情に憤慨して一九〇八年一部学生が反対運動を起して、ラスキン・コレッジを純然たる労働階級独自の教育を施すべき学校たらしめる事を主張して造った運動の機関である。訳して平民(又は庶民)同盟と言う。之は労働階級の教育を慈善家、博愛家の手より引き離し、労働者自身の指導の下におき、総じて天下り式の教育を排斥せんとする運動であった。而して此の同盟の運動は学校当局と直ちに衝突し、一九〇九年に同盟の学生は遂にストライキの挙に出で、次いで数カ月の後、同じオックスフォードに別個の労働学校を設立するに至った。

此の学校は中央労働大学(Central Labour College)と呼ばれ、南ウェイルス炭坑組合及び鉄道従業員の組合より財

政的の支持を仰いで居たのである。併し二年の後（一九一一年）ロンドンに移され今日に及んだ。斯くして分立した新しき学校がその最初に少からず財政的窮乏を告げたと言う事は謂う迄もない。学生を派しつつある労働組合からおさめられる修業料は辛うじて学校の費用を償いうる程度のものであった。併し、一九一四年に於て、上記二大組合が共同して此の学校を買収する事を決議し、一九一六年その計画が実行せられて以来基礎が初めて強固なるものとなったのである。ロンドン労働大学と現在呼ばれつつあるものがそれである。修業年限は二年であり、一九二四〇五年に於て三十三人の学生が在学して居た。而して明瞭なるマルクス的主張を根抵とした授業が行われつつある。一方プレブス・リーグは更に労働階級独自の教育の宣伝につとめ、月刊プレブスを発行し、一九二一年には労働大学全国評議会(National Council of Labour College)を起した。現在本部をエディンバラに置き、全国に亘って、一千余の学校を開講し、二万五千余の労働者の教育に當って居る。前記の「労働大学」は此の評議会の下にある唯一の寄宿制の学校であって、他は夜学校である。而して此のN・C・L・Cはラスキン・コレッジと共に、一九二五年以来労働組合評議会の教育組織に加えられ、その統制の下に広く全国的に労働者教育運動に活動しつつある。(後藤信夫)」

「改造社版・社会科学大辞典」(一九三三年刊)に掲載されているプレブス・リーグについての紹介は、おそろくまとまったものとしては本邦最初のものであり、そして当時においては、もっとも正確なものであったであろう。

ところで、本稿においては、そのこと自体一つの興味のある解き明されなくてはならぬことだと思われるが、いかなるルートでプレブス・リーグが当時のわが国の社会・大衆運動と関係をたもっていた人々に、その存在を知られることになったか、またどのようにそれがわが国の労働者教育や労働運動に摂取されていったかを追跡しようというのではない。わが国における近代・現代史の展開のなかで、単に社会主義運動のみならず、さまざまの面で国際的關係、

影響はいちじるしいものがあり、そのことを考慮しないではすまされない。また、それらの交流がいかなる曲折と変容を、日本社会というプリズムを通して起こったかも重要な考察の課題となる。しかし、さしあたってプレブス・リーグについて、そうした視点から取り上げようとするのではない。ただ因みにふれておけば、一九世紀末からイギリスで展開されたいくつかの労働者教育のための運動の一つであった大学拡張運動(University Extension Movement)の線上に定着し、産業革命の研究者としてすぐれた研究成果をのこしながら、三十才に満たずに夭逝したA・トレンビーの名とともに有名なセツルメント運動が、大正十二年関東大震災後に、末弘厳太郎・穂積陳重博士などの指導で東京帝大セツルメントとして導入、定着され、わが国の社会状況のなかで少なからぬ意味と役割を果たしたことと考える。今日ではその存在が、全くといってよいほど忘れられているプレブス・リーグとわが国知識人・労働者との関係、その影響を究明することによって、社会運動史上のいくつかのかくれている事実⁽¹⁾に、新しい照明をあてうるのではないかと考えられる。

さて、本稿ではプレブス・リーグあるいはC・L・C (Central Labour College, のやのN・C・L・C=National Council of Labour College) そのものの歴史にかぎって明らかにしえた限りでふれることになる。

一九世紀中葉以後のイギリスの社会、社会科学、社会思想、やや限定して社会学の動向は、いうまでもなく労働者階級のそれとかかわりなしには論ずることができない。その点を別の視角から言えば、一八世紀末から一九世紀に一つの社会層として強固な力をその社会にもつことになったミドル・クラスと、労働者階級の形成、社会労働運動の展開その両者の関係の解明なしには、イギリス社会についての理解はむづかしいということでもある。むしろその事がイギリス社会に関する考察の上で、的確な問題の設定といえる面もあるであろう。そうした現実から明らかにされた

イギリス社会史の検討の上に、はじめてさまざまな問題が現代史的意義をもって蘇生してくるものとさえ考えられる。⁽²⁾そこでただちに浮びあがってくるいくつかの検討すべき対象、事態がある。羅列的にはあるがそれも示せば、たとえば、イギリス社会においてミドル・クラスがもつ役割・比重はいかなるものであるのか、労働者階級の組織化の上で如何なる意味をそれはもったのか。労働者階級といわれるが、それを単一のものとしてとらえてよいのか。労働組合運動の展開が如何なる形をとり、いかなる要因がその運動の展開の基礎となったのか——これらはイギリス社会における社会的編成、労働党の基盤・社会主義の性格、諸社会思想やイギリス社会学理論の展開の特性といったごとき問題の解明に結びつけられるものである。⁽³⁾

プレブス・リーグの歴史をたどることによって、もとよりそうしたことのすべてが明らかになるのではない。また本稿においては直接それらの問題あるいはそのうちの特定の問題と関連づけてプレブス・リーグを取り扱おうとするのではない。

本稿の目的は、当面次の点にかぎられている。その一つは、一九世紀中葉からイギリスにおいてみられた労働者教育の展開を、その一般的な背景のなかで、やや特異な形をもちながらすすめられたプレブス・リーグに焦点をあてて追跡してみることである。そのことによって、労働者教育にあらわれたいくつかの傾向を鳥瞰し整理する。第二は、労働者教育の方法、組織にみられる相違は、イギリスにおける労働者階級内部の地域的・思想的、傾向の差違にもとづいているものであり、労働組合運動のいくつかの傾向の反映でもある。そのことをプレブス・リーグの歴史をみていくなかで、あわせてあきらかにすることにある。第三には、労働者教育上の諸組織、諸傾向の総合過程——amalgamation——が、そのうちに含んでいる性格と、問題点をみることにある。なお、あらためてふれるまでもないが、政治

史、労働運動史のなかに、その成立の事情については簡単にふれられながら、展開の全容についてはふれられていないプレブス・リーグについての資料的紹介をふくめて、その歴史を可能なかぎり、あきらかにするのが本稿のねらいである。そのことに中心をおきながら、さきにあげたイギリス社会での諸問題点が、全体としていくらかでもあきらかになるように論述するようにしたい。⁽⁵⁾

(1) 「社会科学大辞典」のプレブスリーグの執筆者名は松方三郎のペンネームである。昭和初年にプレブス・リーグのテキストの翻訳、スライドの活用がおこなわれており、協調会「イギリスの労働者教育」などにふれられている。しかし、ここではわが国との関連については、いづれ別の機会にゆづってとり扱わない。

(2) ファシズムの抬頭、政権の奪取の過程において、「中間層」「中産階級」がなった役割や、それについての分析として、とくに第二次大戦後にいくつかのすぐれた成果をうんだ。また「大衆社会」の問題をめぐる検討のなかで、「新中間層」「旧中間層」についての論議がすめられるなど、「ミドル・クラス」の問題は幾度かとりあげられてきた。しかしながら、それを各国、各社会の社会的編成のなかで、十分に史的分析をもかねて、吟味しているとは言いがたいように思える。たとえば最近、A. Giddens, : *Class Structure in the Advance Societies* などの研究が発表されているが、わが国では、なお不十分であり、戦後社会の変化のなかでのミドル・クラスの動向、あるいは国民の多くの部分でのいわゆる「ミドル・クラス」化といった問題は、より鋭い検討を必要としている。

西欧社会においては、その社会的編成、社会・文化的側面そして政治・社会労働運動の面で、単に計量的な区別としてのミドル・クラスとしてでなく、その歴史的動向、内実、社会全体に占める比重などをあきらかにすることなしには、その構造を十分にとらえることはできない。本編が対象とするイギリスにおいては、G・D・H コールが「経済的制圧にもかかわらず政治的には貴族と労働者階級の中間的存在として成立した一九世紀イギリス産業資本家層を指す」(The Concept of Middle Class, *Studies in Class Structure*) と規定しているが、現実には拡大された内容をもって、自己評価としても社会編成上も明確に一つの階級として区画されるミドル・クラスの存在を軽視するなら、ほとんどイギリス社会の解明は不可能に近いとさえいえる。この問題に立入ることはできないが、社会構造分析上の留意すべき問題として、それぞれの社会構成の解明の上で、相当の重みをもって、今日あるいは今後とも社会学的視点からも検討されるべきものであることを指摘しておきたい。

(3) 現在までのところ、イギリスの社会史とのかかわりにおいて十分にイギリスの社会学の展開が解明されているとはいいがた

い。もちろん、若干の例示をすれば十九世紀後半の労働運動との関連で、イギリスにおける実証主義派（コント学派）をフォローしたものとして、R. Harrison, *Before the Socialist-Studies in Labour and Politics 1861~1881* があり、イギリス社会学史として C. Abram, *The Origin of British Sociology 1830~1914*。また Fletcher のスペンサー、コントなどについての再検討があり、政治史として河合秀和「イギリス現代政治史研究」など注目すべき業績が、いくつかあらわれていることはある。だが、A・ファーマガソン、J・S・ミル、H・スペンサー、C・ブリス、B・ウェップ、L・T・ホップハウスなどのそれぞれについての深い検討や内的関連（あるいは差違）について、また彼等の社会学理論、思想と社会史との関連など、さらにフランス・ドイツ・イタリアなどの西欧社会、社会学説との関連、異同について、わが国での研究は十分にすすめられているとは言えないと考える。さらに十九世紀後半からの K・マルクス、F・エンゲルスと当時のイギリス社会学者との関係、その後のマルクス主義の社会学理論への影響、さらに K・マルクスの学問的展開にイギリス社会そのものが与えた影響など、追究されてよい問題が数多くのこされているとみてよい。

本稿は(2)においてふれたイギリス社会の構造的分析（史的分析）と、イギリス社会学（K・マルクスをふくめて）の展開とをあきらかにするための前段的作業であり一部分となる。本稿以後、H・スペンサー、C・ブリス、B・ウェップなどの社会学理論についての検討、イギリス社会の構成、とくに労働者階級の分析などを通して、それをすすめたい。その際、イギリスの社会学理論の学史的検討にとどまらず、比較社会論、社会変動論と結びつけ、「社会構造」の歴史的理論的検討をめざして、考察することになろう。

- (4) のちに内容については、あらためて紹介することになるが、プレブス・リーグについては、例えば A・テイラー「イギリス現代政治史」（都築訳みすゞ書房刊 A. J. P. Taylor, *English History 1914~1945, The Oxford History of England*）A. Pelling, *A History of British Trade Unionism* J. Klugmann, *History of the Communist Party of Great Britain* などに僅かな記述がみられる。しかし、そのほとんどは、一九〇八~九九年にかけての成立時についての短かい紹介におわっている。

- (5) 本稿は、一九七三年度法政大学在外研究員としての研究成果の一部である。そのすべてを明記することはできないが、在外研究中御援助を得た R・P・ドーア教授、中岡三益氏、山田秀雄教授、T・U・C の図書館のライブラリアン、書記をはじめ多くの方々に謝意を表する。なおプレブス・リーグそのものについてヒントや資料を与えて下さった加納竜一氏に厚くお礼を申上げる。

一、プレブス・リーグの成立

(一) ラスキン・カレッジ

一八九九年三月二十二日、ジョン・ラスキン (J. Ruskin) の名を冠して、オックスフォードに、ラスキン・ホールが設立される。その後改名したラスキン・カレッジとして、しかも伝統的なレジデントアルなチュータシステムの大学として設置されたものである。プレブス・リーグをみるためには、まずこのラスキン・カレッジから出発しなくてはならぬ。

それまでの労働者教育については、大づかみにいって、四つの傾向・流れがあったといつてよい。その一つは、慈善家による労働者への一般教育をおしすすめるもの、第二は、主に技術教育を中心としたものであった。前者では、一八〇〇年にスコットランド (グラスゴー) での成人教育のためのもの、後者では一八二二年設立のロンドンのメカニックス・インスティテュートが最初のものでされている。第三は労働組合運動の伸展にともなって、それとの協力関係をもちながら、インテリ、ジャーナリストがすすめていった労働者教育であり、のちに労働者教育協会 (Working Men's Educational Association = W. E. A) に結集していくものである。これと並びかつ交錯しながら、第四のもとして、大学拡張運動、セツルメント運動、協同組合運動などの形で、若いインテリ、主に大学生たちによって、労働者教育が、一八八〇年代に入るにあたって急速にひろがっていく。その四つのながれは、時間的経過を示しているとともに、内容的な発展をも示していた。つまり、労働者が日常生活を行なうにあたって、もっとも身近な読み、書き、算に習熟するといった段階での教育から、技術、技能の習得、さらに労働者階級としての広い意味での思想的

向上、イギリス型ではあれ「社会主義」を学んでいくといった形への発展をしめしている。しかも第三の傾向が、チャーチスト運動、第四のものが一九世紀末の社会主義の第二の昂揚期の具体的所産であったことは、意味深いものである。しかも、いずれの場合にもミドル・クラス、その出身のインテリによって実質的に労働者教育が行われていたことも、見逃すことのできぬ特徴点である。

それらの動きを背景として、労働者にとっての独自の高等教育機関が開設されなくてはならぬとする気運と、要求・必要は一九世紀の最終時点には熟してきていたといつてよい。すなわち、クラフトマンが形成するクラフト・ユニオンは、もはや典型的なものではなく、新しい労働組合、新しい労働者の形成が、機械の更新、発展のなかで起りつつあった。クラフト・ユニオンから一般ユニオンへの編成替えが、徐々に進行する事態の変化と階級的対立の激化が底流にあった。また社会民主党などのマルクス主義あるいは非マルクス主義の立場にたつ政治結社が、相次いで活動をはじめていたし、あるいは未だ明確な組織体とはなっていないくとも、実質的な活動が展開されはじめていた。

こうした一般的背景のなかで、一八九八年からラスキン・カレッジの設立のうごぎが起ってくる。それには三人のアメリカ人の存在があった。ウォルター・ブルーマン夫妻とチャールス・ベアードである。ブルーマン夫妻はカレッジの設立基金の担い手として、ベアードは設立の推進者、実質的担当者としての役割をもっている。このラスキン・カレッジ設立の立役者たちについて、なお不明の点はあるが、まずウォルター・ブルーマンについては、一説では「慈善家」と説明されている。しかし、他の文書ではアメリカ、ミシシッピ州、セントルイスに住み、アメリカの「ウルトラ・デモクラット」であったと記されており、また他の文書ではラスキン・カレッジ設立後アメリカに帰り、そこでも労働者教育の発展に尽した「社会主義者」として、著名であったとされている。アン・L・ブルーマン夫人

は、富裕なアメリカ人の娘で、夫の意図に完全に共感して、労働者のためのカレッジの基金の拠出のみならず、自らがカレッジに定住して（第一次世界大戦中）、とくに通信教育部で活動した。炭鉱労働者のためのスカラシップの基金が彼女によって提供され、現在にまでいたっている。ベアードは一八九八年秋から、オックスフォード大学のヨーク・ポウエル教授のもとで英国史の研究のため、大学院学生として在学していた。のちにアメリカで地方史の研究者として活躍した。一九四八年に死亡したのだが、彼がオックスフォード大学で勉学中、短期間夫婦と同じオックスフォードに在り、哲学を学んでいたブルーマンと知りあう。この出会いがラスキン・カレッジの設立に結びついていくのである。

ブルーマン夫婦とベアードの説得活動がつづけられ、さきにあげたポウエル教授をはじめ、T・H・グリーン教授、R・H・トニー教授、G・D・H・コール、のちに首相となったC・R・アトリーなどが、このカレッジの設立およびその後の運営に名をつらね、協力する。そのみでなく当時の労働界を主導した人物たちからも援助の手がさしのべられた。とりわけI・L・PのリーダーであったK・ハーディは積極的であった。これらの人々によって根まわしされたうえで、決して彼自身は社会主義者ではなかったが、広い意味で労働者教育の必要をみとめ、社会的名声を保持していたジョン・ラスキンが、このカレッジのシンボリック存在として設立の代表者となったようである。設立後にも問題はひきつがれるが、労働者階級のための労働者を主体とするカレッジを、伝統を誇るオックスフォード大学が承認し、その場をあたえるのには、少なからぬ抵抗があったし、文書・資料に記録されている範囲を上まわるその存在は、容易に推測できることである。「ラスキン・カレッジの歴史」(The Story of Ruskin College, University Press, Oxford 第三版一九六八年)が、開巻冒頭に「ラスキン・カレッジは、七十年余の歴史をもって、今も存在

している」と書き、「カレッジは維持されつづけてきた」と述べているなかに、設立からの後の苦難と、それに耐えた自負を読みとることができる。

だが、設立の集会はオックスフォードのシティ・ホールで、ユニオンジョックと星条旗を交互に飾り、堂にあふれる参会者を得て盛大に開かれたと「オックスフォード・クロニクル」は報告している。その日が、ラスキンの八十才の誕生日を記念するためのものであったとすると、ジョージ・ワシントン大統領の誕生日に因んだとするものと二つあって、やや興味をひくが、そのいづれであってもこの際は本稿全体にとっては重要ではない。

以上のごとき経過をたどって開学にいたったラスキン・カレッジの意義と基本的性格について、大づかみな要約をおこなうなら次のごとくである。第一には、資本主義社会で、とりわけ西欧社会の伝統的な教育体制のなかで、高等教育の一部に労働者教育の公的な機関としてそれが設立されたことは画期的なことであった。そして第二にはそれが特殊な職業教育の域をこえて、正に高等教育の機関としてオックスフォード大学で労働者階級のために門を開いた点で、それ以前の労働者教育の方向を前進させるものとなった。第三には、もとより労働者の側にそうした要求がひろがっていたことは事実であるが、広い意味での進歩的なインテリ、中産階級のイニシアティブによって、実質的には設立が可能となった点で、基本的には伝統的な大学の枠内にそれは包摂されていた。第四には、このこととかわつて、ラスキン・カレッジによせられた期待は、のちに述べるが、必らずしも一つのものではなく、こうした面での最初の経験であったこともあって、当初から複雑であったことがあげられる。強力なカレッジの運営、方向づけについてのプリンシプルが確立していたのではなく、華々しいそのデビューの陰には、物質的面でも、その嚮導原理についても異質のものを内包されていたとみなくてはならぬ。どのような形であるかはともかくとして、ラスキン・カレ

ッジとしての方向づけの純化の為の試練が、待ちうけていたといえる。それ故、設立の段階でのラスキン・カレッジを、内容的、質的に一義的に性格づけることは困難である。最後にさらにつけ加えておけば、英・米のインテリの国際の協力によって、ラスキン・カレッジが設立されたこと、そしてその後のイギリス内外でのこうした機関の嚆矢となったことを、その特質としてあげることができる。

ラスキン・カレッジの設立に関連していくつかの点を、イギリス社会の構造や社会関係・思想などとの考察と結びつけて註記しておきたい。

まずJ・RUSKINについてはあらためてふれるまでもなく一九世紀後半の代表的文芸評論家であり、思想家とされているが、E・バーカーは「ラスキンは、カーライルよりも社会主義的思想の持主ではなかった。彼は社会主義者が積極的に考えていた経済の民主的統制や土地の国有化などには反対で、土地は土地所有者の利用によってむしろ人間生活の快適さがうみだされと考えていた」「彼はソシアリストと呼べるどころか、プラトニストでありつづけた」と述べている (E. Barker, *Political Thought from 1848~1914*, The Home Library of Modern Knowledge, 1915, p. 195~196)。一九世紀中葉から論議の中心の一つとして土地問題があったが、バーカーの叙述は当時の事情をあわせ考えれば、ラスキンの立場をはっきりとらえたものといえる。しかしラスキンの交友・交際の範囲はひろく、社会的活動でも積極的であったし、それよりもかの有名な「二つの国民」の存在といわれるイギリス社会の構造、とりわけミドル・クラスを中軸としたイギリスのリーディング・クラスの同一階層における水平的交流の親密さが、この時期までは強固に保たれていたことから、主義・主張によるグループ間の懸隔と決定的対立は未だ存在せず、共通の交流・討議の場を、その層は保持していた。そのため、幅広い知己の存在と寛容さが、ラスキンをして、労働者教育の新しい試みのシンボルたらしめたと考えられる。

ラスキンの思想傾向や実績にもかかわらず、ラスキンのこの事業とのかかわりへの反対があった。一例としてあげれば、F・ハリソンがH・スペンサーを批判した時、そのことによってラスキンはハリソンとのそれまでの交友を中止することになったほど、ラスキンとスペンサーは近かった。しかし、ラスキンがラスキン・カレッジを設立するにあたって、スペンサーは「労働者に対して、社会主義的教育をおこなうのは容認できない」として、図書の寄贈依頼を断っている。このことのなかには、スペンサーの反社会主義的立場がつらぬかれているとともに、ラスキンのその行為そのものについての反対がふくまれている。こうした事情が一般的にもあるだけに、逆にラスキンがシンボルとして俗に言えば担ぎ出されたとみてよからう。

しかし、オックスフォード大学でラスキン・カレッジに肩入れをした教授たちは、すでにその中心人物の名はあげたが、いうまでもなく「社会主義者」たちであり、一九世紀末のイギリス社会思想の新しい担い手たちであった。そして公然あるいは間接的にイギリス労働党の理論的側面を支えた人々であり、大学外からこれをサポートしたのも、労働党領袖であった。そしてその底には、組織をのばしつつあったT・U・Cをはじめとする労働者組織があった。その動きに対して、当然大学内に強い反対勢力があり、その二つの流れは決して当初から和解していたのではなかった。ラスキン・ホールからカレッジにいたるには、「大学教育」機関としての規制にふくせしめることと、それとして「存続」せしめようとする考えとの妥協が必要であったし、それは行なわれた。イギリスの「社会主義」、労働党の性格、イギリス型の政治的行動原理が、労働者教育のための高等教育機関を大学当局に承認せしめることを可能にしたのであり、その質をみる上で、注目されてよい。

こうした事情をうけて、ラスキン・カレッジ設立の趣旨は、いくつかにそれぞれの人々によって異なっていた。大別するならば四つに分けられる。その一つは、一九世紀前半からひきつがれている一般的な労働者教育の必要性をみとめるものであり、支配層からのいわば労働者の（教育的）底あげ、それによる広い意味での体制内化をすすめようとするものである。J・S・ミルなどにみられる「教育」――とりわけ労働者、女性のその重視につながるものである。それとの連続あるいは重なりをもちながら、ある種の慈恵的処置としての教育の普及としてではなく、より積極的に労働者の権利として、それに教育の機会均等をあたえ、高度の教育機関への労働者階級出身者の進出をおしすすめようとするのが第二のものである。第三にはさらにそれを「社会主義」教育とむすびつけ、明確に方向づけることをめざした傾向がある。第四には、それとむすびつき、実践的な面を重視し、労働組合、地域社会などでの広範な労働者教育の活動家を養成するためのものであるとみるものがあつた。第一および第二の傾向は、リベラル派、そして大学内の「社会主義者」の多くがそれをめざし、第三および第四は大学内の一部の人をふくめて社会主義者たち、そして労働組合の指導者たちであつた。個々の人物が、いづれの傾向にあつたかを、個別にあきらかにするまでには至っていないが大づかみに整理するならば、こうした流れが存在していた。ブルーマン(W & A Vrooman)とベアード(C. Beard)は、設立にあつて「アングロ・アメリカ同盟 英語使用国の市民としての連がりをもとにこのプランをイギリスの教育の中心で実現したい」と考え、「労働運動の拡大強化からさらに労働者のステイトマンシップの確立」のためにオックスフォードを撰んだとのべているが、この当時の英米の関係や、イギリスの国際関係上の位置からみて、衝撃的で効果的プランであつたといえる。それ故、ことなつた考え方がありながらも、設立ということ、そのことにむかつて、それぞれの考え方の相違はむしろ結合されたともみられる。

ラスキン・カレッジについては前掲の「ラスキン・カレッジの歴史」ほか Watson ed, Ruskin College, Encyc Lopedia of

Education 1921, W. W. Craik, Central Labour College, Lawrence & Wishart L. T. D. 1964 などにくわしい。なお Ruskin College, Oxford, Prospects. Annual Report を参考とした。同種のロングタームのレジデンタル・カレッジは、現在イギリスにラスキン・カレッジをふくめて七つあり、その他ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (L・S・E) をはじめとして大学での労働者教育の講座は多数存在している。正規の教育機関や労働組合での教育活動、社会 (成人) 教育のなかにくりこまれているそれについては多様であり、参考にすべきものが少なからずある。ラスキン・カレッジのその後の展開もあわせて、ここでは詳しくふれられないので別の機会にその紹介はゆずりたい。

(二) プレブス・リーグの成立

「一八八〇年代および一八九〇年代のマルクス主義は、ほんのわずかな少数者にとつての信条にすぎず、労働組合では、いちじるしく孤立していた。しかし一九一〇年までの間に、工業労働者のなかに広い影響力をもつようになった。このことは、オックスフォードのラスキン・カレッジの初期の歴史によって実証することができよう。ラスキン・カレッジは、労働者の高等教育のための中心的機関としての小さなレジデンタル・カレッジであり、一八九九年にアメリカの寄附者によつて設立されたものである。その後、労働組合評議会や他の労働組合がその運営の実権をもっている。一九〇八年に、このカレッジの学生の多くは、学監であるデニス・ハード (D. Hird) とともに講義内容の再編をおこない、マルクス主義経済学および社会学に全面的に基礎づけられたものとするようにした。しかし、財源をうることに失敗して、彼等はカレッジから分離し、彼等自身の労働大学 (Labour College) を設置した。やがてまもなくロンドンで活動をはじめた新しいカレッジを支援するため、プレブス・リーグと名付けられた組織が結成された。その名称はアメリカのマルキスト、ダニエル・デュ・レオンのパンフレットからとつたものである。

プレブス・リーグのメンバーの多くは、南ウェイルズ炭坑労働者連合か総合鉄道従業者協会かの労働組合に所属し

ていた。そして彼等は一九一一年から一二年の彼等の組合の戦闘的な戦術につよく呼応していた。

一九一〇年にイギリスにかえってきたトム・マンは、サンジカリズムの宣伝・普及をはじめていた。プレブス・リーグのメンバーのなかに、この考え方つまりサンジカリズムがうけいられるのを彼は知って活動をつづけていた」。(H, Pelling, *A History of British Trade Unionism*, Pelican Books 1963, p. 140)

冒頭に掲げた後藤信夫のプレブス・リーグの紹介と、このペリングの文章との間には、その成立の過程についてやゝ異なった叙述がみられる。その主要な相異点は、ラスキン・カレッジの学生たちが要求していたものが、中心的に何であったか、そしてその要求をひきおこした社会の条件、労働組合運動における変化と背景の認識の仕方にあらわれている。そこで、このことに焦点をあわせながら、プレブス・リーグの成立の事情を整理することとする。

すでに述べたように、ラスキン・カレッジの設立は、極めて画期的なものではあったが、それが安定していくためにはいくつもの困難な事態が内包されていた。それは第一にラスキン・カレッジが労働者教育のための高等教育機関である点では一致していても、それをどのような内容・質へとしていくかは、必ずしも一致していたわけではない。まず設立目的の点で、次に教育の実際にたずさわるスタッフの間で、またスタッフとともに集った学生たちとの間で、さまざまな形で相違、対立がみられた。第二には、オックスフォード大学の運営にあたる機関と、ラスキン・カレッジの間には、その承認をめぐる緊張関係が存在していた。その第三にはラスキン・カレッジの維持・存続をめぐるの財政上の問題が十分に解決されないままに残されていた。それにくわえて、ペリングが指摘するように、新しい社会・労働運動上の潮流がおこっており、労働者階級をめぐる状態も変化してきた。I・L・Pの活動が活発となり、強い影響力はないとしても、マルクス主義的傾向が労働組合内部に徐々にひろがりはじめ、失業問題を中心に

して労働問題が、重要な社会問題として浮び上ってきていた。こうしたラスキン・カレッジの内外の状況が、プレブス・リーグの成立とからんでいる。

しかし一般的条件・問題の存在だけでなく、プレブス・リーグの結成に結実していくためには、それを推進した人物とか、グループがなければならなかった。それが、学監のD・ハードであり、主にウェイルズ出身の学生たちであった。彼等を結びつけていたのは、ラスキン・カレッジを単なる教育機関とするのではなく、労働者の教育のための実践に役立つものにそれをするのであった。オックスフォード大学の管理的地位にあった人々との対立も、実はそこにあったし、ラスキン・カレッジの性格を明確なものにしようとする意図もそこから発していた。このことはつぎの点にむずびついている。ラスキン・カレッジの開学後間もなく学監としてブルーマンに招聘されたハードは、オックスフォードの大学院修了後僧職にあって、活動し、S・D・Fに加入したりしたが、基本的には社会学徒——社会有機体説の進化論者であった。またウェイルズの労働組合は、フランス風のサンジカリズムの傾向が強く、その影響をうけた学生が多かったが相方ともに、明確な思想的一致をみていたのではない。マルクス主義を基調とする講義内容を組むことでの同意より以上に、大学の管理機構内とじこめられることに反対する点でより結束していたとみるべきである。それは、標榜された「マルクス主義」による教育の内容・質ともかかわっていた。彼等は、ラスキン・カレッジの財政上の困難の解決ともあわせて、団体および個人的協力者をうるよう出身地を中心に活動をはじめた。

具体的には、一九〇七年頃から、ラスキン・カレッジが真の労働者のためのカレッジとしての面目を保つべきだとする動きがあらわれる。そして、一九〇八年の十月にいたって、ついに有志によって、プレブス・リーグが結成される。さきのベリングの文章にある通り、アメリカ社会主義者労働党のリーダーであったダニエル・デュ・レオンの

Two Pages of Roman History によつてのべられたローマ時代の階級闘争の担い手であつた無産平民のたたかいに因んで、この結社がプレブス・リーグと命名された。プレブス・リーグは年一回の年次大会をひらき、ラスキン・カレッジと労働運動とを結合させ、在学生、通信講座の受講生の連絡をとりその組織化をはかること、月刊誌「プレブス」を発刊すること、四人のオックスフォードのレジデント学生が中心機関を構成し、セクレタリーをおくことなどを決定した。初代のセクレタリーとしてジョージ・スィムズ——建設労働者で、バーモンズイのS・D・Fの活動家——が指命された。これにたいして学監のハードは、その目的に全面的に賛成し、雑誌「プレブス」の編集責任者がかつてでた。かくて、ラスキン・カレッジはレイバー・カレッジとして、その存立の性格を明確にし、プレブス・リーグとラスキン・カレッジの重層関係がみられることとなる。

雑誌「プレブス」は、一九〇九年二月に創刊号を発刊することとなり、対外的にも公然たる活動をはじめることになる。それまでは、プレブス・リーグはラスキン・カレッジ内の組織ともみられた。しかし、創刊号の発行後まもなくの一九〇九年三月の最後の月曜日（二九日）に、ラスキン・カレッジの学生がストライキに入り、一般新聞紙にそのことが報ぜられ、それまでに進行していたカレッジ内のうごき、プレブス・リーグの存在が露わなものとなる。新聞報道では、このストライキをハード対大学管理委員会（評議会）の対立・紛争としてとらえ、学生がハードの擁護に立ったものとしてとらえているが、対立・紛争の真因、背景には、ラスキン・カレッジをめぐる教育内容上、および労働運動内部の新しい思想的動向が存在していたのである。

プレブス・リーグの成立の時点を、一九〇八年とするものと、一九〇九年のストライキを重視して、そこに求めるものとあるが、全体の経過からみて、当然前者でなくてはならない。しかし、後者とみなされるのには、このストラ

イキ後に五四人の学生中、十名が新学期の開始にもかかわらず復学せず、プレブス・リーグの趣旨にもとづく新しい労働学校（レイバー・カレッジ）の設立に参加し、八月二日にセントラル・レイバー・カレッジをオックスフォードに開くことになったので、これをもって組織的活動の確立と考えるからである。この組織はインデイベン・ワーキングクラス・エデュケーションをめざし、マルクス主義によることをあきらかにした。かくて、プレブス・リーグ＝セントラル・レイバー・カレッジ（G.A.G.N.C.L.C, National Council of Labour College 一九二一年設立）となり、ラスキン・カレッジから全く分離したものとなる。両者の関係は、中央労働大学が教育機関として常設され、その学生および卒業生（通信生をふくむ）、さらに労働組合員のなかの有志、活動的メンバーがプレブス・リーグの会員となり、カレッジの援助・協力、そこでの労働者教育の普及と実践に尽力するといったものである。

「しかし、この時代の著名な闘士のなかで、最大の人物は、一九一〇年に再びイギリスに姿を現わしたトム・マンであった。かれは、世界中の労働者階級の解放闘争に参加した経験をもっていた。かれは、労働党政府の弱点を見出したオーストラリアや、フランスのサンデリカリズムをその地で研究した、パリを含む旅行から帰国すると、直ちにイギリスの労働組合における新しい政策と組織のための闘争にとびこんだ。いくつかの闘争的グループや、それぞれの産業にメッセージをおくっていたが、マンはジャーナリストのガイ・パウマンの協力をえて、一連の月刊パンラットを編集したり、時には「サンデカリスト鉄道員」や「運輸労働者」のような定期刊行物を出版した。また南ウエールズの非公認の改革運動からは、有名な革命的労働組合運動の文獻で、A・Jクックも協力してつくった「鉱夫の次の一步」(the Miners next step 一九一二年)が出た。一九一〇年秋には、二〇〇名のサンジカリスト代表が、マンチェスターで会合し、「産業サンジカリスト教育連盟」を結成し、その後援で「産業サンデカリスト」が月刊で発行され、翌年までつづいた。さらに、一九一二年、パウソンの編集による「ザ・サンデカリスト」の第一号が発行された」(A・Lモートン、Gテイト「イギリス労働運動史二七七〇～一九二〇」古賀良一訳法大出版局刊二九〇頁)とのべられているように、一九〇五年から十年間は、サンデカリズムの影響がつよく、とくに南ウエールズの炭鉱地帯にそれはひろがっていた。プレブス・リーグがこれと直接、間接のかかわりをもっていたことはすでにふれた通りである。このこと

とあわせて留意しておくべきことは、イギリスにおける労働（組合）運動の内部では、地域的な差異が強くみられ、同一職種でも組織的にさまざまなちがいがみられる。S・ウェブの労働組合史などに跡づけられているように、個々の単位組合の独自性がつよく、それが業種別、全国的組織に拡大していくのには、長い年月を費やしている。今日でもなおそのことが、労働者の強い地域的特性として残存している点については、R・P・ドーア *British Factory, Japanese Factory* 1973 を参考されたい。大づかみにいって、南ウェイルズ、スコットランド、中部イングランドは左派的でイングランドは中間的あるいは右派的とみられており、その相違については「伝統的・歴史的」なものであると説明される場合が多いが、そのことのなかには、一例としてここに引用したような、これまでの運動の発展過程と、イギリス社会の社会構成、人種、宗教上の問題があることをみておかなくてはならない。

南ウェイルズのみならず、全体として社会主義思想が二十世紀に入ってからさまざまな教育機関のなかにひろまり、一九〇六年には「社会主義が一九〇六年ほど公衆の目に大きく映ったことは、ながい間ないことであった」（F・ニース）とされている。この時期のうごきが、プレブス・リーグの成立の前提にあり、「一九〇三年早々には、労働者の思想的昂揚と教育の機会に対する要求が非常につよかったので、労働者階級運動の諸関係と大学が協力して「労働者教育協会」（the Workers Educational Association 略称WEA）を設立し、この要求に応じると同時に、他方ではマルクス主義の影響にも対抗」（前掲モートン、テイト）「イギリス労働運動史」（二七六頁）するうごきのなかで、学生たちのマルクス主義による労働教育の確立の要求、プレブス・リーグの形成は、当時の労働運動、教育活動の動向、思想的争点の一つの具体的、典型的あらわれであった。こうした点で、プレブス・リーグの成立は、ラスキン・カレッジ内における些細な内紛といった種類の問題ではなかったのである。

オックスフォード大学の内部では、こうしたうごきにつれて、プレブス・リーグに参加する学生、学監をチェックする方針がだされることとなる。そしてついにハードの罷免を評議会で決定しようとするにいたって、前記のストライキがおこる。ストライキの主要な要求は、ハード擁護（具体的には彼以外の講義はきかないなどを申合わせる）と、評議会の運営の公正をもとめるものであり、ストライキは旬日を経ずしておわるが、闘争の成果はほとんどなかったといっている。ハードの罷免については、本人からの離任といった形でおさえるなどの妥協がなされたにすぎない。大学内の大勢としては、W・E・Aに代表される傾向にかたむいていたからであろう。それと、数字的に明らかにすることはできないが、おそらくラスキン・カレッジの維持の財源が薄弱で、内紛によって、カレッジそのものの存立が危うくなるといった事情が存在していたものと思われる。この間の内部事情については、前掲の Craik, *Central Labour College* にくわしい。また、当時の労働運動史上の思想的・組織的動向については、モートン・テイトの著書、および J. Klugmann の「イギリス共産党史」が参考になる。

因みにふれておけば、中央労働大学の設立にあたって、アメリカの社会学者L・ウォードが、これに賛意を示し協力している。クレイクも指摘しているが、ラスキン・カレッジの発足、プレブス・リーグの命名、そして中央労働大学の出発にあたって、アメリカ（人）との関係が深いことは興味をひく点であり、こうした労働者の運動との関係にそって、当時の欧米の社会学者をみていくことによって、新しい側面があらかになるであろう。F・テンニースのハンブルグの沖仲士ストでの役割などもふくめて、イギリスの社会学者についても、この点から見なおされてよい問題がある。

二 プレブスリーグの活動

一九〇八年、プレブス・リーグがラスキン・カレッジの学生を中心に結成されてから、一つの組織として活動をはじめるのは、一九〇九年二月の雑誌「プレブス」の発刊においてである。そして、プレブス・リーグの独自の活動は、この機関誌の刊行、拡大にあったといつてよい。しかし、実質的には、このことをふくめて四つの面でその活動がひろめられていった。すなわち、プレブス・リーグN・C・L・Cとよばれるように中央労働大学などをはじめとする労働大学による活動、次にそれに附随していた通信講座による活動、さらに労働組合および地域での講座開設などによる教育活動である。これになおつけ加えるならば個々の同盟員（プレブス・リーグの加盟者）が、労働運動のほかでプレブス・リーグを名乗っておこなった活動をあげることができる。ただしこの点では、活動の中心が労働者教育となっているので、特別の場合にのみかぎられていたようであり、本部に対して各地域で支部組織といったものが明確に形成されて、その単位で社会・労働運動・労働組合運動などに、プレブス・リーグとしての独自の方針をもって、一貫して取り組んだとみられる事実はほとんど見当らない。

こうした活動がたどった経過を、まず大づかみに示せば、

一九〇八年、プレブス・リーグの結成

一九〇九年 雑誌「プレブス」発刊 中央労働大学開設（オックスフォード）

一九一一年 中央労働大学、ロンドンに移転

一九二一年 全国労働大学評議会（N・C・L・C）結成

一九二六年 中央労働大学（別称ロンドン労働大学）、T・U・Cの傘下に吸収される。

一九六二年 N・C・L・CもまたT・U・Cの傘下に入る。

一九六六年 雑誌「プレブス」、フェビアン協会の機関誌の一つとなり、プレブス・リーグ解消

以上によって、約六〇年にわたるプレブス・リーグの歴史が閉じられることになる。

この間、プレブス・リーグの本部、すなわち「プレブス」の発行および刊行の形式がいくたびか変えられている。

そのことに、プレブス・リーグの歴史がぎざまれているので、活動の内容を知る手がかりとして、記しておこう。

創立時（一九〇八年）は、本部は一時ラスキン・カレッジに同居し、誌名「Plebs」副題なしで発刊する。ラスキン・カレッジにおけるストライキ後は、オックスフォードのブラッドモア・ロードに中央労働大学が移転し、独立した活動の体制をととのえる。一九一一年ロンドン・アールス・コートに中央労働大学を移し、そこに本部もうつる。しかし、なおオックスフォードに活動の基盤はおかれていたようで、一九二一年まではその体制が維持されたようである。一九二一年に全国労働大学評議会が設立される頃から、本部はエディンバラにうつされ「プレブス」の副題に「N・C・L・C機関誌」が入る。発行所の本部が正式にロンドンからエディンバラにかわるのは一九二八年である。

だが、一九三〇年にはロンドンにもどっておりこの二年ほどは *Labours oldest and liveiest monthly* の副題にかわる。

それも、またN・C・L・C・C機関誌に復帰する。しかし、一九六二年から一九六五年にかけて、副題がさきのものにかえり、六七年十二月には Monthly Journal of Labour Opinion の副題がつき、六七年には、編集委員会の組織が一新して、労働党・フェビアン協会のメンバーによって構成される。それまでの編集は、D・ハード、T・P・M・ミラー、D・ハリバアンが編集長として、「プレブス」の刊行に責任をもっていた。この様にさまざまな曲折を経ながら、プレブス・リーグはともかく半世紀におよぶ活動の歴史をもちえたわけであるが、その経過を大別すると三つの時期に区切ることができる。

第一の時期は、プレブス・リーグの設立から中央労働大学の活動を中心とした一九二〇年前後までである。この間の特徴は、ラスキン・カレッジからの分離・独立の過程にみられるように、その活動は方向も明確で、いわば草莽期にあたる。それ故、少数ではあるが、活動的分子の積極性にささえられて、財政的困難にもかかわらず組織を維持、発展させていく。一九一二年頃には、すでに財政上の苦しさから維持困難におちいるが、一九一四年に南ウェイルズの炭坑組合、鉄道従業者組合の強力な支持によって、経営は安定化の見通しがみられた。そして各地にウィーク・デーは夜間、日曜は昼間に開講する労働大学（講座）がつくられていく。正確な記録によってたしかめることはできないが、おもにウェイルズ、スコットランド、北部イングランドに学校が多くひらかれていた。

ここで注目しておかなければならないのは、第一にW・E・Aと対峙し、マルクス主義を基礎とすることを鮮明にしていた点であり、第二には、イギリスのいわゆる左派系組合によって、プレブス・リーグがバック・アップされていたことである。この後者の点が、その後のプレブス・リーグのうごきを規定する要件となってくる。

第二の時期（段階）は、全国労働大学の結成から、一九二五年に中央労働大学がT・U・Cによって管理されたの

ち、N・C・L・CⅡプレブス・リーグとして活動する戦中（あるいは戦時）期までである。量的にみれば、この時期が最盛期であって、約三万五千名の労働者を組織していたし、刊行した書籍が二万五千部売れたと発表されている。そして、恒例の「夏の学校」——おもにスコットランドなどの景勝地で一週間から十日ひらかれたものであるが、——は盛会をつづけた。そして、一九二六年から二七年の有名なゼネラル・ストライキには、各地の同盟員であり労働大学の出身者が、その積極的担い手として活動した。

しかしながら、他方ではT・U・Cへの各労働組合の統合、参加が進行することによって、それぞれの独自性が発揮される余地が小さなものとなっていた。さらにプレブス・リーグⅡN・C・L・CをささえてきたI・L・P議員がT・U・Cと強い結びつきをもつようになり、労働党の意向が、政策面からも、N・C・L・Cの構成員の面からも、プレブス・リーグの性格を規定するようになってきた。一九二八年に、「プレブス」の会則をあらためて、「プレブスおよびN・C・L・Cの学生の会」としたが、このことで、T・U・Cの指導にもとづく下部大衆の意志が、リーダーのそれまでの指導理論を制約することにもなった。

それにさきだって、一九二五年に先にふれたようにC・L・CのT・U・Cへのいわば移管がおこなわれるのであるが、これをめぐってかなりの意見の対立があったようである。つまり、財政上の問題の克服とともに、W・E・A的な内容が教科内にもちこまれる点についてである。形としては中央労働大学の自主性はたもたれたことになっているが、実質的には、「産業民主主義」的方向がもちこまれていった。ここで、プレブス・リーグとしては、その城の一面を開けわたしたことになる、組織的拡大と同時に、質的後退を余儀なくされたとみなくてはならない。

第三の時期はおもに戦後の段階で、「プレブス」がフェビアン協会の機関誌に移行することに象徴化されている。

戦後における労働党・T・U・Cの発展については、ここにあらためて述べるまでもない。T・U・Cとの関連をつよめた各労働組合の教育活動は、そのなかに包括されていくとともに、労働党の教育政策によって、大学・成人教育への公的補助が拡大したことは、プレブス・リーグが唱えてきたインディペンデント、ワーカーズ、エデュケーションが組織の基盤の上からみて、その存立の独自性を失ったことを意味している。そしてすでに労働大学の出身者から多くの労働組合役員や、労働党議員を出していることと相俟って、ますますT・U・C、労働党よりになっていくのを止めることはできなかった。もとよりT・U・C内部での左派に、それらの人々は属しているが、T・U・Cへのアマルガメイトの傾向は否定できず、マルクス主義的立場も弱化することになる。細部についてはあきらかではないが、労働党の理論部隊を構成するフェビアン協会との結合は、全体の布置状況からみて、至極当然のこととして推しすすめられることとなった。かくて、T・U・Cの教育政策、事業の一環としてN・C・L・Cも位置づけられ、それまではなお独自性をたもっていたラスキン・カレッジの通信講座とともに一九六六年T・U・Cのなかに吸収されることになったのである。

この間のN・C・L・Cにみられた活動で特色とされるのは、教育活動の面では、少数のインテリゲンチアをふくんではいるが、チューターは、労働者自身（労働大学出身の）であり、構成メンバーについては、あくまでも自発的に参加する労働者であったことにある。この点では、いわゆる上からの教育活動としてではなく、あくまでも労働者自身の労働者のための教育活動の実践という当初の原則をまもりぬいていた。その点では、プレブス・リーグはきわめてユニークな教育活動の組織として存在しえていたわけである。数多くのテキストや出版物を刊行して、一般の販売ルートとは別に自らのネットを組みえていたことも、他には多くの例をみないものであった。これらをふくめて、

非共産党的「マルクス主義者」集団のイギリスにおける一つの在り方を示したものとして、関心と注目をひくにたるものであったといつてよい。

一九三五年四月号（一八巻四号）の「プレブス」は、発刊一九五号ということで、あらためてプレブス・リーグ、およびN・C・L・Cの解説、宣伝をおこなっている。そこでは、N・C・L・Cの支援組織やプレブス・リーグの歴史などがふられていて興味がある。そのなかで、最も強調している点は、「W・E・A」に代表される労働者教育の立場についての批判である。W・E・Aの立場を資本家と妥協したものとときめつけ、G・D・H・コールなどを名指しして、協調主義的傾向として批判している。すでにのべた如く、プレブス・リーグの最盛期にあたる時期であり、イギリス労働運動の昂揚期であることを反映して、その調子はきわめてたかい。それが、のちに一回転して、批判の対象となったフェビアン協会への吸収となっていくところに、プレブス・リーグそのものについても、またイギリスの労働運動あるいは社会主義についても、単線的解釈を下しえない要素があり、注意しなくてはならぬ問題がある。それは、言葉をかえればイギリス社会の在り方の問題であり、そこにおける（労働者）階級の形成過程の問題がある。また社会運動の展開についても、このことからいくつもの考察の糧をひき出すことができるように思う。なお、プレブス・リーグの「マルクス主義」についてしるための例としてであるが、一九三五年二月号で二五周年記念号が特集されているなかで、はっきりと反レーニンの傾向が示されている。そこには二つの問題——つまりマルクス・レーニンの関係をいかにとらえるか、ロシア社会主義をいかに評価するかがふくまれているが、あいまいではあるが、そのいずれについても雑誌は否定的で、T・U・Cの見解にちかいかいものとなっている。そのことは、基本的には——時間的状況的な差異はあるが——プレブス・リーグが、その活動、展開の基礎として共産党よりも、よりつよく労働党に近い性格を胚胎していたとみてよい。活動のスタイルとしては、毎年の「夏の学校」のもち方や講義、宣伝は、今日のわが国でみられるものとはほぼおなじであったようで、スライドを使用するなど工夫がこらされている。各地の夜の学校がどのようにおこなわれたかについてはたしかめるべくもないが、おそらく、現在さまざまな成人教育でおこなわれているものの原型であろうと思われる。こうした伝統が、今日でも「講壇」に依拠する「左派」よりも革新的な知識人や活動家の存在を可能ならしめているものと思われる。そうした系譜や状況については、十分にたしかめてはいないが、今後の問題をみていく上では見すごせないものである。このこととかかわって、「プレブス・リーグは、スコットランド、南ウェールズおよび中部イングランドにいくつかの学校を設立し」（モートン・テイット「イギリス労働運動史」邦訳二九〇頁）、南ウェールズには「南ウェールズ社会主義協会」スコットランドには、「社会主義労働党」が活躍し、現在では両地方は労働党のつよい基盤であり、グラスゴーでは共産党の力がつよいとされていることなどの関連

を、歴史的全体的にみていくことが必要であろう。

中央労働大学におけるカリキュラムや出身者などについては、W・W・CRAIKの「中央労働大学」の附録にくわしい。プレブス・リーグの主張については、もとより「プレブス」がもっともよい資料である。労働者教育の歴史については、B.Simon, *Studies in the History of Education—Education and the Labour Movement 1870~1918*, A.J.Corfield, *Epoch in Workers Education* などがある。この時期の全体の動向をしるのには、すでにあげたA・P・テイラー「イギリス現代政治史」などが参考になる。

イギリス共産党書記長であったH・ポリットが、反ファシズムのたたかいに統一するよう訴えた時、「プレブス・リーグマルキスト」とよんで、その一翼にくみいれている。プレブス・リーグは、共産党からはそうした距離をあたえられていた存在である。このことをJ・クルッグマンの「イギリス共産党史」によってみると、

「マルクス主義者と改良主義者のイデオロギー的和解はとうていありえなかったが、実践上の連帯は共産党と労働党支持者の間にはなりたっていた。(共産) 党はそれ故プレブス・リーグの唯物論的見解にたいして批判をくわえていった。プレブス・リーグ(のちのN・C・L・C)の多くは党の積極的協力者であり、R・W・ポストゲートにひきいられる人々は、党と協力することに逡巡していた。プレブス・リーグは、しばしば抽象的でドグマチックな方向をとり、全体的関連をもたない孤立した“マルクス主義”であった。党はプレブス・リーグとの関係をたちきらずその方向に批判をくわえていった。党のないマルクス主義はありえないと指摘した。」(第一卷三三五頁)とのべている。これは「プレブス・リーグに対するイギリス共産党の政策」として、正式に定められた方針であった。そのなかで、くりかえし、プレブス・リーグのマルクス主義のドクマ性がのべられている。この評価はA・P・テイラーもおなじであって、当時公刊されていたこの種の系統のものをふくめて、幼稚で独断的であるとしている。この点にプレ

ブス・リーグの理論的弱点が存在していたことは否定できない。

しかし、今日においてもマルクス主義を名のる諸団体・組織はイギリスで数多く活動しているが、それらがさまざまな形で公開あるいは非公開の論争をかさね、しかも行動の統一は問題毎にくりひろげられている。イギリスにおけるこの一世紀におよぶ歴史のなかで、むしろそれが常態であったとさえいえる。そうした事態のなかで、そのそれぞれがいかなる軌跡をしめし、いかなる形で統合、変化していったかを、今日の視点から見返してみることが、決して意味のないことではないと考える。その一つとして、プレブス・リーグをここにとりあげたのであるが、いうまでもなく、明らかにされるべき点は数多くのこされている。冒頭にのべたように、そうした不十分な点を今後あらためてみていくことによって、イギリス社会の変化の過程、そこでの労働者階級の成長過程をみていく必要がある。そのことのなかで、あわせてイギリスの社会学の問題、さらに社会学理論一般も、あらためて検討されることになるであろう。